

転のころ

波柿の 波がそのまま 甘味かな

この句は作者不詳とされていますが（一説によれば加賀の千代女とか）
今号はこの句を通して、『転』の妙趣を味わってみたいと思います。

私は江州の産なので、秋が深まって参りますと、農家の軒先につる下がっている吊し柿の寸景を懐かしく想い起す事です。

日当りのよい軒下に並べられた柿のれんの波柿は、日ざしを一杯受けて日増しに甘柿に転じていきます。唯、そのまま転じていきます。渋味を除去するとか、甘みを注入するという事は一切なく、唯々そのまま転成していくのです。誠に不思議な自然の営みと驚かされる事です。

お正信偈に「不断煩惱得涅槃（フダンボンノウトクネハン）」とあります。煩惱を断ずる事なく、そのままの形で涅槃を得るという事です。『波柿の波がそのまま甘味かな』のこの句がその味わいを端的に現しているように思えます。ここで大切な事は「そのまま」の味わいで。唯のそのままではなく、皮をむいてのそのままなのです。皮をむかないでのそのままは熟柿となって腐って落ちてしまします。皮をむいて、光に当ててのそのままです。

私にとって皮をむくとは、自我を捨てる事でしょうが、私には全くその手立てはありません。しかし、如来の大慈悲心の不思議な妙用があると教えられています。ご聴聞を重ねたいものです。